2026年度 第6回（11月）北辰テスト対策 予想問題　解答・解説

国語

1　問1（4点）

ア

①の直後に根拠がある。前の席の由佳は「配られたその日に『看護科』と書いて出してしまった」とあり、その「迷いのないその字」を見た「わたし」は「自分だけが地図を持たずに歩いているような気がした」と感じている。

・ア 由佳との比較・決められない自分・心細さ（地図を持たない）が本文と一致→正答
・イ「すでに決めている」「家族に反対される」は本文にない（実際には何も書けていない）
・ウ 先生に注意された場面は本文にない
・エ 由佳への反発は描かれていない

採点ポイント: 欄が「白い」＝何も書けていないこと、そこに由佳の「迷いのない字」が対比されていることを読み取れているか。

1　問2（4点）

時間を忘れていた

②は、作業に夢中になるあまり、時がたつのもわからなかった去年の「わたし」の様子である。内藤さんはそれを、のちの会話で「千晴ちゃんは去年、ねじを並べながら、時間を忘れていたろう。」と言い表している。

・「時間を忘れていた」（八字）が正答

採点ポイント: 内藤さんが「わたし」の**去年の様子**について言った言葉から探すこと。「夢中になれる」は、これからのことについて言った言葉なので不正解。

1　問3（6点）

(例) 今夢中になれることを一つずつ重ねていけば、将来へ続く道は見えてくる（33字）

正答例:

・(例1) 今夢中になれることを一つずつ重ねていけば、将来へ続く道は見えてくる（33字）
・(例2) 夢中になれることを積み重ねていくうちに、将来進む方向が定まっていく（33字）

根拠: ③のあと、内藤さんは「それも、一つの歯車だよ。何になりたいかが先に決まっていなくてもいい。今、夢中になれるものを、一つずつかみ合わせていけばいいんだ」と言いかえている。歯車＝今夢中になれるもの、針が前に進む＝将来に向かって進んでいける、という対応をとらえてまとめる。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
①「夢中」が使えている	1点	指定語必須
②「将来」が使えている	1点	指定語必須
③ 今夢中になれることを一つずつ重ねる（かみ合わせる）という内容	2点	「積み重ねる」「つなげていく」等も可
④ その結果、将来（進む道）が見えてくる・前に進めるという内容	1点	「将来がわかる」等も可
⑤ 25〜35字の字数を守っている	1点	逸脱は減点

指定語の使用順序は問わない。

1　問4（4点）

イ

④の直後に「あの日のわたしを、内藤さんは見ていたのだ」とある。また、②の段落で「わたし」は、あのとき何が楽しかったのか「自分でもうまく説明できない」と述べている。その自分でも言葉にできなかった夢中な様子を、内藤さんが見ていてくれたことに驚き、心を動かされたのである。

・イ が正答
・ア「作業が遅かった」「恥ずかしさ」は本文にない
・ウ 内藤さんの言葉は「意外」だったが、仕事への思いを疑っているわけではない
・エ 内藤さんの言葉は「わたし」の悩みに答えるためのもので、話をそらしたのではない

採点ポイント: 「思わず顔を上げた」という動作が、驚きと、見ていてもらえたことへの感動を表していると読み取れているか。

1　問5（5点）

ウ

⑤の直前に「それが正解かどうかは、まだわからない」とあり、そのうえで「それでも」と続く。また「わたし」は、機械科の実習室の写真に「なぜか長いあいだ目をとめていた」ことを思い出しており、去年の職場体験で夢中になった気持ちと結びつけて学校名を書いたと読める。「歯車がかちりとかみ合った」は、内藤さんの言葉どおり、今の「好き」を一つかみ合わせることができたという手ごたえを表している。

・ウ が正答
・ア「必ず」「確信」「不安がすっかり消えている」は、「正解かどうかは、まだわからない」と合わない
・イ 由佳と競う気持ちは描かれていない（由佳は先に提出している）
・エ 店を継ぐという話は本文にない

採点ポイント: 「まだわからない」と「それでも」の両方をふまえ、確信ではなく「手ごたえ」としてとらえているか。

1　問6（5点）

ア・ウ

・ア: 「地図を持たずに歩いている」は、どこへ向かえばよいかわからない心細さをたとえた表現→適切
・イ: 本文は「わたし」が語り手であり（「わたしは、思わず顔を上げた」など）、内藤さんの視点ではない→不適切
・ウ: 内藤さんが「歯車」で語った考えが、結末の「小さな歯車がかちりとかみ合ったような気がした」に受けつがれ、「わたし」の変化を印象づけている→適切
・エ: 商店街は帰り道の場面として描かれているだけで、町の人々が反対している描写はない→不適切
・オ: 「進路は決まったかい。」など、会話文が多く用いられている→不適切

採点ポイント: ア・ウの二つを両方選んで正答（5点）。一つだけ、または三つ以上は0点。

2　問1(1)（2点）

もうら

網羅＝残らず全部取り入れること。

採点ポイント: 「もうら」以外の読みは不正解。「あみら」は誤り。

2　問1(2)（2点）

ゆだ

委ねる＝物事の処理や決定を、ほかの人に任せる。
採点ポイント: 下線部は「委」。読みは「ゆだ」(「ゆだねる」と書いても可)。音読みの「い」は不正解。

2　問1(3)（2点）

貿易

貿易＝外国と品物の売り買いをすること。
採点ポイント: 「貿」の上の部分（卯に似た形）や、「易」を「昜」と書く誤りに注意。

2　問1(4)（2点）

預（ける）

預ける＝人に物などの世話や保管を頼む。
採点ポイント: 「予」＋「頁」の組み立て。同じ読みの「授ける（さずける）」とは別の字。

2　問2(1)（2点）

ウ

「全員のゴウイ」＝合意（合）。ア号令（号）／イ豪華（豪）／ウ合格（合）✓／エ強引（強）。すべて「ゴウ」と読むが、「合意」と同じ漢字を含むのはウのみ。
採点ポイント: 「強引」の「強」も「ゴウ」と読むことに注意し、意味から書き分けられるか。

2　問2(2)（2点）

イ

「窓ぎわへイドウする」＝移動（移）。ア偉大（偉）／イ移住（移）✓／ウ意欲（意）／エ遺産（遺）。すべて「イ」と読むが、「移動」と同じ漢字を含むのはイのみ。
採点ポイント: 同音の別漢字（偉／意／遺）を音だけで選ばず、「うつる・うつす」という意味から選べるか。

2　問3（3点）

イ

動詞の活用の種類は、「ない」をつけて、その直前の音で見分ける（ア段→五段活用、イ段→上一段活用、エ段→下一段活用。「来る」はカ行変格活用、「する」「〜する」はサ行変格活用）。
・信じる→信じ（じ）ない＝イ段→上一段活用
・ア 切る→切ら（ら）ない＝ア段→五段活用（「きる」とイ段の音で終わるが、上一段ではない）
・イ 起きる→起き（き）ない＝イ段→上一段活用 ✓
・ウ 閉める→閉め（め）ない＝エ段→下一段活用
・エ 練習する→サ行変格活用
採点ポイント: 言い切りの形の見た目ではなく、「ない」をつけた形で判断できているか（「切る」「走る」「帰る」などは五段活用）。

2　問4（3点）

イ

・A「トマトが」:「何が―どうした」の形で考える。「トマトが―売られた」で主語・述語の関係になる。「育てた」の主語は「兄が」（兄が―育てた）であり、「トマトが」ではない（「兄が育てた」はまとまって「トマトが」を修飾している）。
・B「近所の」:「近所の―店で」と、体言をふくむ文節「店で」をくわしくしている（連体修飾語）。「近所の売られた」では意味が通らない。
・よって A＝売られた、B＝店で のイが正答。
採点ポイント: 主語・述語の関係は「～が―どうした」でつなげて確かめ、修飾・被修飾の関係は二つの文節を続けて読んで意味が通るかで確かめられているか。

2　問5（3点）

ア・ウ

「登山」＝「山に登る」と、下の字が上の字の動作の目的・対象を表す構成（「～を」「～に」を補って下から読める）。
・ア 読書＝「書を読む」→同じ構成 ✓
・イ 温暖＝温かい・暖かいで、似た意味の字を重ねた構成
・ウ 帰国＝「国に帰る」→同じ構成 ✓
・エ 雷鳴＝「雷が鳴る」で、主語・述語の関係
・オ 深海＝「深い海」で、上の字が下の字を修飾する構成
採点ポイント: ア・ウの二つを両方選んで正答。「～を」「～に」を補って下から上へ読めるかを一語ずつ確かめられているか。

2　問6（3点）

エ

季語と季節は、昔のこよみ（旧暦）にもとづいて決められているため、今の感覚とずれるものがある。
・ア 季語「天の川」＝秋（七夕は旧暦の七月で秋。夏ではない）
・イ 季語「五月雨」＝夏（旧暦五月ごろの長雨＝梅雨。春ではない）
・ウ 季語「朝顔」＝秋（夏ではない）
・エ 季語「大根引き（大根）」＝冬（畑から大根を引きぬく冬の作業）✓
採点ポイント: まず句の中の季語を見つけ、その季節を旧暦の区切りで判断できているか（「天の川」「朝顔」は秋、「五月雨」は夏）。

2　問7(1)（2点）

イ

「図書室へ来る」のは村井さん（敬意を表す相手）なので、相手の動作を高める尊敬語を使う。「参る」は「行く・来る」の謙譲語で、自分や身内の動作をへりくだるときに使う言葉なので、ここでは誤り。
・ア 伺う＝「行く・聞く」の謙譲語→相手の動作には使えない
・イ いらっしゃる＝「来る・行く・いる」の尊敬語→正答（「図書室へいらっしゃるそうです」）
・ウ 参られる＝謙譲語「参る」に尊敬の「れる」をつけた形で、敬語の使い方として誤り
・エ お伺いになる＝謙譲語「伺う」を「お～になる」の尊敬の形にした誤った言い方
採点ポイント: 動作をするのはだれか（村井さん＝相手）を確かめ、謙譲語ではなく尊敬語を選べているか。

2　問7(2)（2点）

イ

森さんは「対象は一年生だけですか。それとも、全校に呼びかけますか。」と疑問を出し、委員長の「ほかの学年からも参加したいという声がありました」という説明を受けて、「ポスターに『どの学年も参加できます』と書き加えてはどうでしょうか」と具体的な案を示している。

・イ が正答
・ア 敬語の誤りを指摘する発言はない
・ウ 反省点や中止の提案はない
・エ 話し合いをまとめているのは森さんではない（森さんは案を出している）

採点ポイント: 森さんの二つの発言（質問→提案）の流れをとらえられているか。

3　問1（4点）

イ

①の直後に根拠がある。「同じ額のお金をすぐに手渡せば、貸し借りはその場で消える。しかし、そのようなことをする人はまずいない。もしそうすれば、相手はかえって気を悪くするだろう」。貸し借りを消す一番簡単な方法があるのに、だれもそれを選ばず、選べば相手が気を悪くする――この食いちがいを筆者は「不思議」と言っている。

・イ が正答
・ア 負担の話は第六段落で、①の理由ではない
・ウ「値段の高い品物を選ぶ」は本文にない
・エ「お金のほうが相手は喜ぶ」は本文と逆（気を悪くする）

採点ポイント: 直後の「しかし」「かえって」に着目し、何と何が食いちがっているのかをとらえられているか。

3　問2（4点）

関係を一回ごとに区切ってしまう

第三段落の最後の文「お金によるやりとりは、その場で貸し借りをなくし、関係を一回ごとに区切ってしまうからこそ、見知らぬ者どうしでも気軽に行えるのである」が、まとめの文と対応している。

・「関係を一回ごとに区切ってしまう」（十五字）が正答

採点ポイント: まとめの文の前後（「その場で貸し借りをなくし」「見知らぬ者どうしでも気軽に行える」）と同じ言葉を本文から探し、その間の部分を字数どおりに抜き出せているか。

3　問3（6点）

(例) わざと小さな貸し借りを残し、それを返し合うことで、相手とのつながりを続けていく（39字）

正答例:

・(例1) わざと小さな貸し借りを残し、それを返し合うことで、相手とのつながりを続けていく（39字）

・(例2) 貸し借りをすぐに清算せず、お返しを行き来させることで、人とのつながりを保つ（37字）

根拠: 第四段落「贈り物のやりとりは、わざと貸し借りを残しておく営みだといえる」と、最終段落「相手とのつながりを受け取っている」「目に見えない『借り』を通して、人と人とを結びつけるしくみ」をあわせてまとめる。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
①「貸し借り」が使えている	1点	指定語必須
②「つながり」が使えている	1点	指定語必須
③ 貸し借りをすぐには清算せず、わざと残す（返し合う）という内容	2点	「その場でなくさない」等も可
④ それによって相手とのつながりが続く（保たれる）という内容	1点	「結びつける」等も可
⑤ 30〜40字の字数を守っている	1点	逸脱は減点

指定語の使用順序は問わない。

3　問4（5点）

ウ

第五段落で、器を「空のままではなく、半紙や小さな菓子などを入れて返す習わし」が挙げられ、「品物そのものの値打ちより、やりとりが途切れないことのほうに重きが置かれている」と述べられている。第四段落の「すると今度は、相手のほうに『もらった』という気持ちが残る」というしくみと同じである。

・ウ が正答

・ア「同じ値打ちの品物」は、値打ちより途切れないことを重んじるという内容と合わない

・イ「必ず高価な品物」は本文にない（「半紙や小さな菓子」）

・エ「その場で終わらせる」は、お金によるやりとりの特徴であり、逆

採点ポイント: 「小さなもの」を入れることの意味を、第四段落の「貸し借りを残す」しくみと結びつけて考えられているか。

3　問5（4点）

イ

この段落は「もちろん」で始まり、お返しの習慣のわずらわしさや、近所づきあいが少なくなった現状という、筆者の考えとは反対の面をいったん認めている。そのうえで次の段落が「しかし」で始まり、「すべてのやりとりをその場で清算してしまう社会は、……どこか心細い」と筆者の考えを改めて示している。

・イ が正答

・ア 考えを取り下げてはいない（次の段落で「しかし」と主張を続けている）

・ウ 数字は示されていない

・エ 言葉の由来は説明されていない

採点ポイント: 「もちろん……。しかし……」という、反対の面を認めてから主張にもどる組み立てをとらえられているか。

3　問6（5点）

ウ

本文全体の主旨:
・お金によるやりとりは、その場で貸し借りをなくし関係を区切る
・贈り物のやりとりは、わざと貸し借りを残し、行き来を続ける営み
・わずらわしい面もあるが、小さな貸し借りの積み重ねが「お互いさま」と助け合える関係を育ててきた
・結論: 贈り物の文化は、目に見えない「借り」を通して人と人とを結びつけるしくみ
・ウ が正答
・ア 筆者は、すべてを清算する社会を「どこか心細い」と述べており、逆
・イ お金によるやりとりを否定してはいない（見知らぬ者どうしでも気軽に行えるという利点を認めている）
・エ「高価な贈り物」で決まるという内容は本文にない（品物の値打ちより途切れないことが大切）
採点ポイント: お金のやりとりと贈り物のやりとりの対比をふまえ、筆者の結論をとらえられているか。

4　問1（4点）

おもうよう

二か所を直す。
・「ふ」: 語中・語尾のハ行「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」に直す→「おもう」
・「やう」:「ア段の音＋う（au)」は「オ段の音＋う（ou)」に直す。「や（ya）う」→「よ（yo）う」
・よって「おもうよう」
採点ポイント:「おもうやう」(「やう」の直し忘れ)、「おもふよう」(「ふ」の直し忘れ）は不正解。

4　問2（4点）

ウ

直前に「かの人の足にしつかと食ひつきければ」とある。蟻がかみついたのは「かの人（＝竿で鳩をとらえようとした、ある人)」の足であり、足をかまれて驚き、飛び上がったのは「ある人」である。そのあとの「竿をかしこに投げ捨てけり」も、竿を持っていた「ある人」の動作である。
・ウ が正答
・ア 蟻は「食ひつき」の主語で、おびえあがったのではない
・イ 鳩は、そのあとで「悟りて」「飛び去りぬ」の主語になる
採点ポイント: 古文では主語が省かれることが多い。「〜ければ（〜したので)」の前後で主語が入れかわることに注意し、「足にかみつかれた人」はだれかを考えられているか。

4　問3（4点）

ウ

それぞれの動作をしたのはだれかを確かめる。
・ア 見て:「鳩、梢よりこれを見て」→鳩（おぼれかけている蟻を見た）
・イ 落としければ：梢を食い切って川に落としたのは、「見て」と同じ鳩
・ウ 食ひつきければ:「蟻心に思ふやう、……と思ひ、かの人の足にしつかと食ひつきければ」→蟻 ✓（他と異なる）
・エ 悟りて:「鳩これを悟りて、いづくともなく飛び去りぬ」→鳩
採点ポイント: 主語が書かれている語（「鳩、」「蟻心に」）から次に主語が書かれるところまでは、同じ人物の動作が続くと考えて、たどれているか。

4　問4（4点）

(例) 何とかしてその恩に報いたい（13字）

正答例:

・(例1) 何とかしてその恩に報いたい（13字）

・(例2) どうにかして恩返しをしたい（13字）

根拠: 最後の一文「人の恩を受けたらん者は、いかさまにもその報ひをせばやと思ふ心ざしを持つべし」。「いかさまにも」＝どうにかして、「報ひをせばや」＝恩返しをしたい、という意味（〔注〕参照）。蟻が鳩に助けられた恩を、鳩を救うことで返した話から導かれる教えである。

採点基準:

要素	配点内訳	判定基準
① 恩に報いたい（恩返しをしたい）という内容が示されている	3点	「助けてくれた人を助けたい」等も可
② 現代語として自然で、10〜20字の字数を守っている	1点	古語の残存（「報ひ」「せばや」など）・字数逸脱は減点